

世界は恐怖する

欧州名画の輸入配給を行ってきた三映社との共同製作になり、配給には三映社が当る。

★ 熱帯魚が生命を次の世に伝えるため性の営みを続けている。一方では二羽の小鳥が放射能を受けて生命を落している。

内容

短物語

原水爆実験のために、放射能を持った死の灰がいま地球の空を包んでいる。それはチリや雨にまじって土にたまり、米や野菜に入り人間の口から入ってくる。息を吸うとき肺からも入ってくる。体に入ったストロンチウム90は骨に落ちていて白血病やガンを起す。

広島市の被爆者で首のケロイドがガンになり、死を待つ人も出てきた。一番恐ろしいのは子孫が死に絶えたり、奇形児が生れる遺伝の問題だ。

放射能を受けた卵から二つ頭の金魚が生れたが人間の場合はどうか。実は広島や長崎には被爆した母親から異常児が生れているのだ。気球や飛行機で調べると、上層大気には死の灰がますます増えている。しかも大国の原水爆実験は次から次へと続けられている。私たちはむなしく破滅の日を待つべきなのだろうか。

が作り出した災害です。だから人間自身がその気になりさえすれば必らず解消できるはずの問題です。



解説 先に「生きていてよかつた」「流血の記録・砂川」などを発表して、今や記録映画の第一人者とされる亀井文夫監督作品。原水爆の実験が産み出す死の灰の恐るべき実体を伝える全九巻・一時間半の長編である。毎日の新聞にストロンチウムやセシウムという活字の出ない日はない。読者は何かしら破滅が迫っているいらだたしさを感ずるが、科学用語のむつかしさもあって、その正体はなかなかつかめない。それをカメラという手段ではつきりとつきとめ、世界の人々の目の前につき出そうというのが製作の意図である。

従って、国内版につづいて、英語版をはじめ各国語版をつくり、広く諸外国で公開することを目指している。

この映画の製作には、別項のように各大学・研究所の多くの科学者が、むつかしい実験の撮影や、貴重な資料の提供に協力した。長時間の撮影は深夜になり、食事を取る暇もない場合が多かったが、

早くカメラの註文にに応じて動いて下さった。もとより、それは原水爆実験の中止を願う科学者としての良心から出るものであった。製作は一九五七年五月の準備期から十月中旬の完成まで五ヵ月あまりを費やし、その間の撮影日数四ヵ月、撮影フィルム二万フイール(四時間分)となった。ロケーション先は東京、広島、長崎、群馬、茨城の大学・研究所・飛行場・野外など三十カ所。

解説は、熱心な原水爆反対論者で、亀井監督と親しい徳川夢声が受持っている。夢声は亀井文夫の戦前の作品「信濃風土記・小林一茶」の解説をしたことがあるが、その俳味あふれる名調子は、亀井監督の詩情豊かなタツチと信州の美しい風物と共に、この作品を日本の記録映画のモニュメンタルな代表作としたものであった。音楽は「生きていてよかつた」「砂川」で好評だった新進作曲家長沢勝俊。「生きていてよかつた」「流血の記録・砂川」を作った日本ドキュメント・フィルム社と、三十年來、

しか許されていないのか。しかしこの映画の作者は最後に言う。「死の灰の恐怖は台風や地震などの天災とはちがって、人間

地球に降りそそぐ姿なき大量殺人魔”死の灰”もはや死の灰を避けて通ることはできない。
私たちの手でそれを取りのぞく仕事だけが残されている。私たちの美しい生命と、こどもたちの楽しい未来を救うために！

ものがたり

プロローグ
南らかな水の中で熱帯魚ブルー・グラミーのオスとメスが愛撫を続けている。それは自分たちの生命を子孫に分け与えようとする生きとし生けるもの美しい性の営みである。
だが、こうして生れ出た貴い生命を無残に奪い去るものがある。その名は放射能。二羽の小鳥を入れたかごが、放射性物質コバルト60の上に置かれる。十数分の後には、十姉妹の歌声は途絶え、羽根は固く閉じられた。

二十世紀の科学が産んだ原子力は、人間にすばらしい利益を与えたが、一歩誤れば、人類を滅亡させる悪魔に変身する。
原水爆の爆発のため高空に吹き上げられ、やがて静かに地球に降りそそぐ”死の灰”こそ、姿なき殺人魔なのだ。
死の灰はどこに入ってくるか
子どもたちがラジオ体操の会で大きく深呼吸をしている。その空気の中のチリにまじっている。ピニールを敷いた箱に集められた雨水に入っている。
チリや雨水のたまる土、畑、田などに入ってくる。そこから植物や稲や野菜に入ってくる。日本人の常食しているお米からも、植物を食べる牛を通してミルクからも、人間の体の中に死の灰は忍びこむ。

体の中に入った死の灰はどうなるか
ネズミにストロンチウム90を飲ませる実験。ウサギのノドに穴をあけて、ストロンチウム90を肺に流しこむ実験。それは消化器や呼吸器を通して骨にたまり、骨が血液を作る働きを破壊し、骨ガンや白血病をひき起す。



死んだ人の骨を焼いてストロンチウムの分量を調べて見る。成人よりも幼児に多い。白ネズミにストロンチウムを注射するとガンができる。
広島で原爆に合い、首にケロイドのある四十三歳の沢田さんは最近急に体が弱って原爆病院に入院した。ケロイドの部分がガンになったのだ。ガンは命取りの病気だ。この事実が、広島や長崎の被爆者に深刻なショックを呼び起した。放射線ガンの潜伏期は七年から二十五年という長い期間なのだ。死の灰のために子孫はどうなるか
死の灰は、しかし次の世代の子どもや孫への影響がもっと恐ろしい。放射能を浴びた親や卵から、突然変異のため想像もつかぬ奇形の子が生れたり、生れ出るべき子が消滅したりする。
ショージョーバエや、金魚を使ってその実験が行われる。コバルト60を千レントゲン照射した卵から、二つ頭の金魚が生れてきた。千レントゲンと言え、原爆が落ちた広島を中心地の放射能の量と大体同じである。
死の灰は、果して二つ頭の人間人間の血からもセシウム一三七が出てきた(群馬大学山県助教教授夫人)

を生まないと言いつけるか。
広島と長崎の被爆した母親からは、死産児や死亡した初生児の奇形児が現われている。育ちがしたものの、頭の形が小さく、智能もまるで発達しない「小頭児」もいる。これらの異常児は今度はじめて映画に撮影されたものである。
死の灰はどのように増えているか
私たちの血の中にもセシウム137がもう流れている。宮城前の広場には毎夜、多くの若い男女が青春の歓喜に酔っている。だがすぐその下の土や草には、放射能の悪魔が踊っているのだ。
気球や飛行機を使って高い空を調べると、死の灰はますます増えている。
鹿の角は毎年一回切る習わしがある。その角を焼いて調べると、やはり毎年毎年ストロンチウムが増えているのがわかる。
東京の地面の表にあるストロンチウム90は今日すぐ原水爆の実験をやめたとしても、今後十年はぐんぐん増えて行き、やっと六十年後に現在の量と同じになる。高空中の死の灰はゆっくりと地上に舞い下りるからである。
エピローグ
大国の原水爆実験はなおも平気で続けられている。他の国も実験を始める日が来るかも知れない。これでよいのか。私たちに絶望

空気中のチリを集めて放射能の強さを計る(立教大学道家助教教授)



製作スタッフ
製作：大野忠
監督：井上猛夫
撮影：藤井文夫
照明：藤井文夫
音楽：久米光男
解説：長沢勝俊
脚本：徳川夢声
録音：大橋鉄也
同録：奥山重之助
同監督：勅使河原宏
同：小山内治夫

